

園長通信

(令和8年度7月号)

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園
園長 岡部 祐輝

【AIと教育】

1学期も終盤に差し掛かり、今年も猛暑の気配が漂う7月となりました。不快な状況を自らクリアしていく生活の中での学びや気づきを大切に、進んでいきたいと思えます。

今月はタイトルの通り、**「AI」**について少し考えたいと思えます。

ここ数年で、生活の中に広くそして深く入ってきた「AI」。皆さんの生活の中でどのようにかわりがあるでしょうか。とある研修会では、AIについて**「便利」、「ポジティブ」、「助かる」**などの肯定的な意見とともに、**「怖い」、「情報流出の危険性があるのでは」、「理解できない」**などネガティブな要素も意見として出ていました。おそらく賛否がある現状と思えます。

先日私が参加した研修会（セミナー）では、**「学びを促進する活用法と阻害する活用法とは何か」**というテーマで、小学校以上の授業場面での活用法を聞く機会がありました。

紹介された1事例として、このようなものがありました。

「この問題の解答方法をAIは5つ出してきました。さて、皆さんは5つ以上思いつきますか。考えてみましょう」

というものがありました。このような問いを教師から提示された子どもたちは、グループで議論し、様々な方法を考えていたそうです。これはまさに「子どもたちの挑戦心をくすぶる提示」だったと思えます。

他には、**「織田信長は本能寺の変で討たれました。彼はどう思ったのでしょうか」**ということAIに聞くと、AIが織田信長になりかわり、「悔しかったです」と回答したという事例がありました。

これはどうでしょうか。実際、戦いに敗れた信長の声明は聞くことはできませんよね。このようなことを鵜呑みにして「彼にインタビューしたところ悔しかったそうです」と答えるような学習のまとめになってしまうことへの危惧が挙げられていました。

上記はあくまでも一例ですが、AIは現在、大学入学共通テストにおいても満点ないしはそれに近い成績をとっているものもあるほど進化しているとのことでした。

これまで、わたしたちは学習の中で知識を覚え暗記し、テストに臨むという学習をしてきましたが、これからの社会の中では知識量でAIに勝つことは限りなく難しくなったといえます。このような時代背景も踏まえ、今の教育方法や学力観の潮流は大きく変化してきています。

AIを学習の中で活用していくために、配慮すべきポイントはたくさんあると考えられます。

研修会でお話があったこととして・・・。

自分ができることをAIに実行させる→OK

自分で学ぶべきことを任せる→NG

何が不足かわからない中使う→NG

自分の考えがないままに使う→NG

このような考え方が紹介されました。

また、あわせて「問う力」の重要性も昨今教育の世界では強く言われています。あわせて「問いを立てる力」も重要です。

例えば、以下のケースではどうでしょうか。

(A) 私のこのノートパソコンどう思いますか？

(B) 私のこのノートパソコンのサイズはどう思いますか？

(C) 私のこのノートパソコンはうちの会社の業務で活用しやすいスペックだと思いますか？

AからCに向かうにつれて、問いが求める範囲が狭まっています。Aでは、「カッコいい」、「色がきれいね」など思い思いの感想が集まりやすいですが、Cになると、かなり焦点が定まった問いなので、その視点での感想や意見が集まりやすくなります。このように問いの精度を上げることはAIを活用していく中でも重要ですし、その問いを自分事に引き寄せて、関心をもって学ぼうとすることで学習効果が上がると考えられています。

幼児教育では、子ども達が好きな遊びや活動で出合う「なぜ」という思いを支えられる環境構成やかかわりが重要です。保育者や大人のかかわりの中で、「これはどう動くの？」、「これはどうなるんだろうね？」など、子どもが答えたくない問いを投げかけながら、自分の考えをアウトプットしようとする状況を作り支えていくことが、これらの「問う力」、「問いを立てる力」につながる第一歩ではないかと思います。

7月は、水遊び等をはじめ、自然・現象の「不思議」や「面白い」と出合うことが多い時期とも言えます。子どもたちが素材や玩具、経験を通して、「なぜだろう」が膨らむ機会を大切に進めていきたいと思います。